国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」実施概要

2019 年 5 月 19 日（日）、お茶の水女子大学にて、国際シンポジウム「**哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義**」が開催された。冷戦初期の社会動態をジェンダー表象視点から分析するという企画は、ジャン・バーズレイお茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授が進めている先駆的な研究プロジェクトに基づくものである。

基調報告では、当時新しい生き方を模索した若い女性たちの姿が描き出され、それに応答してのコメントでは、女性の多様性に目を向けることの重要性やエンパワメントの必要性が指摘された。論点は、日本におけるフェミニズムやジェンダー概念の浸透などへも伸展し、21 世紀現在の日本のジェンダー状況について考える上でも有用な多角的な議論が展開され、参加者にとって学ぶところの多いシンポジウムであった。

【日時】2019 年 5 月 19 日（日）13:30～16:30

【会場】国際交流留学生プラザ 2 階　多目的ホール

【コーディネーター】ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授/ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

【基調報告】

ジャン・バーズレイ「ロマンスの追憶が映し出す現在：60 年後に振り返る 1959 年皇太子ご成婚」

ジュリア・C・ブロック（エモリー大学准教授）「日本におけるボーヴォワール：『第二の性』の反響をたどる」

【ディスカッサント】北村文（津田塾大学講師）、ゲイ・ローリー（早稲田大学教授）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語（日英同時通訳）

【参加者数】72 名

【シンポジウム要旨】

1950～60 年代の経済成長と、女性の教育機会の拡大、女性雑誌の隆盛、そして中流意識の浸透は、女性たちに新しい可能性をもたらした。彼女たちにとっての新しい選択肢とは何だったのか？女性たちが自由と自己探求、愛という「夢」を実現させるには、何が必要だったのか？本シンポジウムでは、フランス人フェミニスト哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃を取り上げ、この問いに迫る。自己表現、セクシュアリティ、社会との関わり方といった面では極端に異なる両者だが、いずれも、当時大きな社会的影響力を持っていた。また、冷戦という時代背景を踏まえることで、哲学者と皇太子妃に関する議論から、1950～60 年代の国際情勢の渦中に日本が自らをどのように位置づけたのかを見出すことができる。

【登壇者紹介】(当日プログラムからの抜粋)

ジャン・バーズレイ

お茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授/ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授。『Women and Democracy in Cold War Japan』(ブルームスベリー学術出版、2014 年)をはじめ、著書多数。『The Bluestockings of Japan: New Women Essays and Fiction from Seitō, 1911-16』(ミシガン大学日本研究センター、2007 年)では、2011 年の平塚らいてふ賞(日本女子大学)を受賞。ローラ・ミラーとの共編で『Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan』(カリフォルニア大学出版、2011 年)、『Bad Girls of Japan』(パルグレイブ社、2005 年、英語)を刊行。

ジュリア・C・ブロック

エモリー大学准教授(日本学)、ロシア・東アジア言語文化学部長。代表的著作に、文学作品のフェミニスト表象に関する『The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973』(ハワイ大学出版、2010 年)、戦後の男女共学化批判を分析する『Coeds Ruining the Nation: Women, Education, and Social Change in Postwar Japanese Media』(ミシガン大学出版、2019 年)、領域横断的な日本のフェミニズムについての共編著『Rethinking Japanese Feminisms』(ハワイ大学出版、2017)がある。

北村文

津田塾大学講師。専門分野は社会学、ジェンダー研究、日本学研究。東京、ホノルル、香港、シンガポールでエスノグラフィー調査を実施。代表的著作は、『日本女性はどこにいるのか:イメージとアイデンティティの政治』(勁草書房、2009 年)、日本の日英バイリンガリズムとジェンダーを分析した「English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan」(『Gender and Language』10(1)、2016 年)、「Gender, Representation and Identity: The Multifold Politics of Japanese Woman Imagery」(『Handbook of Gender in East Asia』所収、2020 年)、共編書『現代エスノグラフィー』(新曜社、2013 年)。

ゲイ・ローリー

早稲田大学教授。専門分野は日本文学。日本人女性の伝記著作、翻訳を数多く手がけている。代表的著書は、与謝野晶子の『源氏物語』への傾倒を中心に綴った伝記『Yosano Akiko and The Tale of Genji』(ミシガン大学日本研究センター、2000 年)、江戸初頭の宮廷での密通スキャンダル猪熊事件に巻き込まれた中院局の生涯をたどる著作『An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan』(コロンビア大学出版、2013 年)。柳沢吉保の側室、正親町町子による日記文学『松蔭日記』の翻訳書を近刊予定。

大橋史恵

お茶の水女子大学ジェンダー研究所/人間文化創成科学研究科准教授。主に中国、香港、日本における中国語話者コミュニティの再生産領域における移動とジェンダーの問題について研究をおこなってきた。2011 年に北京での長期的なフィールドワークの成果をまとめた『現代中国の移住家事労働者:農村-都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』(お茶の水書房)を出版し、同年、第31回山川菊栄記念婦人問題研究奨励金を受賞している。現在は、香港の移住家事労働者とローカルな家事労働者の労働関係や労働問題に注目している。また、東アジアのトランスナショナル/トランスローカルな女性運動にも関心がある。